

■ 街道へゆこう！ ■

プロローグ 「Good morning!」

ながたかずひさ

シャーッ……

パチパチパチ……パチパチ……

コンコン……

プシュワアアアアアアアアアアアッ……

いい色のベーコンの上にタマゴが落ちて、一段落。

あらためて、徐々に鮮明になってくる意識と共に、昨日の夜を振り返る。

どうして時間見てなかったんだろう。

どうして宿取らなかつたんだろう。

簡単なことなのに……

そう。

あの頃なら、それは僕がやるべきことだった。

だからきつと彼女は、それをしなかつたんだろう。

普段なら素晴らしい手際で、微に入り細に入った計画を立てるのだろう。ちらり、と覗いた分厚いシステム手帳の、びっしりと書き込まれた字を思い出す。

いいかげんに見えてきつちりしていて、

お転婆に見えて実は気配りが細かくて。

バカな冗談に大口開けて笑って。

”……はは、それもあの頃と同じ”

零れる笑みを止めようもなかった。

けど、笑ってる場合じゃない。

昼にはみどりが帰ってくる。

こーんなところ見つかるうものならどんな誤解されたってなんの言い訳もできない。

たといえ何事もなかったにしても、だ！

……今からでも何事のひとつやふたつは可能でないこともないような気がしなくもない……

だってそもそもそういうことなんじゃないだろうか。

流花（るか）的には。

……だよな。

もう高校生じゃないんだからな。

というか高校生でもそうだろう。

いやちよつと待て。

ちよつと待て遼太郎。

物理的可能性を論じる前に倫理的可能性を検討しよう。

密室殺人のトリックを考える前に、殺人はやつてはいかん。

僕には愛する妻がいる。

そう、彼女のことを思えば……

彼女の笑顔を思い出せば……

『がるるるるるる〜！』

角を二本ばかり生やしたみどりが、ダブル包丁で迫ってきた。右に出刃左に柳刃。

ぶるぶるぶる。

メスネコの背中、掻き掻きしてあげるだけでヤキモチを焼くあれのことだ。

そのようなことがもしバレてご覧なさい。
阿部定もある程度覚悟しなくてはならない。
……チョツキーン。

それは……嫌だ……
嫌だよー……嫌だよー……

「泣いたり笑ったり、忙しいね」

「ひゃっ!？」

振り返ると、キッチンの入り口に男物シャツ一枚の流花が立っていた。

「……おはよ」

「あ、うん。お、おはよ」

挨拶を返すと、流花はちよつと目線を逸らした。

恥ずかしいのかもしれない。

僕も、そう。

思い切り着痩せするタイプ、持ち上げられた胸元から皺が伸びる。斜めの裾の下から、白い長い脚が伸びていた。

壁に寄つかかると、なお綺麗に見えた。

しょうがないから、フライパンに目を戻す。

「……よく、眠れた？」

「……うん、まあ……」

あの、これ」

「ん？」

「着せてくれたんだ」

「あ、ああ……うん。そのままだと、風邪ひくかな、とと思って。はは」

「……盛大に脱いでた？」

「んーつと、そこそこ。止める間もなく、ね」

「……ごめん。ほらあたしき、運動好きだからさ、今も軽く走ったりしててさ、だから体温上がってくるとすぐぱーんつて上がっちゃって、熱くてしょうがなくなつて、でき、でね、その……」

「……ごめん」

「別にそんなに謝らなくていいって。目の保養になつたし」

「……嘘ばかり」

「ほんとだよ」

「そんなにじっくり見たの？」

「は!? いや、じゃなくてでつきるだけ見ないようにしてた! こう、それも手探りで着せた!」

「手探り？」

「いやその!」

「……ごめ。冗談。

……ありがとう」

「いやあの……その……うん……」

「……なに、作ってるの？」

「あ、朝ご飯。ベーコンエッグでいい？」

「ん。もちろん。気、遣わせるね」

「はは、いいって。僕も食べるし。」

あれ、ひよつとして朝はあんまり食べない？」

「そんなに不健康そうに見える？　ちゃんと食べてるよ？」

「じゃパンはバゲットかな」

「お。あたり。遼太郎も？」

「ぎーんねん、トースト。それも山形。敵国人？」

「酸っぱくて固いライ麦パン食べるよりはマシだね」

「はは……あ、バター切らしてる。買いに行つた方がいい？」

「いいよお、そんなの」

「マーガリンなら」

「何もつけない方がいいかな」

「はは、だろうと思つた」

「ふふつ、お見通しだね」

「コーヒーにミルクは？」

「オ・レで。意外？」

「……ははーん。読めた。本日の朝ご飯に一番足りない物」

「せーの」

「「チーズ！」」

「あはは……」

「ふふ……」

「今度買つとくよ。ナチュラルの美味しそうなヤツ」

「……今度？」

「あ……いや、その」

「……ブルーとかゴルゴンとか、バゲットに合うの」

「あ……ん。バゲットも一緒に」

「ふふ……」

「あ、ところでさ」

「あ、もうできるよ。向こうで待つてて」

「あ、うん、あの……」

「コーヒーも淹れていくよ。ミルクも温めるんだよね」

「うん。……えと」

「あ、まだ何か欲しいものある？ 冷蔵庫にあるものならなんでも……」

「んと、たぶん冷蔵庫にはない」

「ん？ 齒磨きは朝食前、とか」

「でもなくて、その……」

「ん？」

「……パンツ、どこかな」

ss

「んふふ」

「なにか楽しい？」

「ん。誰かに作ってもらった朝ご飯なんて、久しぶり」

「ははっ……まあ、ありきたりで悪いけど」

「んん、そんなことないよ。作ってくれた、って事実が大事だね」

「はは」

ハリハリハリ……

小気味いい音を立ててトーストがパン粉を散らした。

「……柔らかいのも、たまにはいいね。このパン、美味しい。パン屋さんだね？」

瞳だけこつちに振って、そんな感想。

「ん。駅に美味しいパン屋さんがあつてき。一週間分冷凍作戦」

「ほへ、冷凍なの？」

「うん」

「冷凍でもこんなにもちもちしてるんだ」

「パンがいいのと、あとトーストのコツがあるね」

「どんな？」

「ちよつと余熱してから放り込むんだ。外はかりかり、中の水分は余り逃げない」

「へ〜……遼太郎さ」

「ん？」

「主婦みたい」

「はは……」

くすくす……と体育座りのまま、肩をすくめた。シャツの裾から伸びる艶々の太股が気になってしょうがない。

結局……ぱんつは見つからなかった。

僕のを貸すわけにもいかず、どうするのかと訊けば「いい」とだけ言う。

「いい」って言われても。

こつちはよくない。

目に毒……いや毒じゃないか。でも薬でもない。

「……仕事柄、時間が不規則だから、朝……というか一日の始まりは、自分で作って食べる習慣があるんだよ」

「なるほど、ね。」

「ヨーグルトももらつていい？」

「もちろん」

「じゃ……おー。これは美味しそう」

「見てわかる？」

「クリーム層分離してるヤツには外れはないね」

「流花向きかも」

「美味しい？」

「濃い」

それには応えず、ちよつ、と目を細めて、スプーンで一口。くわえたまま、も
によもによやつている。

「……流花向き」

「ははは」

気に入ったのか、クリーム層を丹念に混ぜ込んでいる。

これ——流花——逢沢流花（あいざわるか）とは、高校の同級生になる。

僕の勤める新聞社は小さな小さな……主筆自らが「吹けば飛ぶような」と笑う地方新聞社である。文化部など専任は僕含め三人という小所帯だ。

しかし創業一九一九年、刻んだ歴史は伊達ではない。中高年層・地元企業を中心に根強い購買層を持ち、士気は高い。

人気の秘訣は地元密着のきめ細やかな情報と、毎年替わりの一点豪華企画。昨年度などは各種文学賞受賞者五人にリレー小説を書かせるという大胆な挙、発行部数までが若干伸び、単行本は結構な数を売って話題も呼んだ。

気をよくした経営陣、今年は兼ねて僕がやりたいと進言してた企画に判をつけてくれた。

それは、旅。

日本各地の、できれば世界のいろんなところを巡り、そこに様々な随筆を交え、読み物として楽しい紀行文を連載する——言えば簡単だが、地味でそれ故に記者の観察眼教養文章力、つまりは力量が問われる。言い出しつぺ本人が「いいんですか？」と確認してしまった随分な博打企画だ。

しかも前年の実績から、大手出版社がバックアップしてくれるという。こちらも随分な乗り気で、旅の手配はもとより、なんとイラストレーターまで挿絵担当として差し向けてもらえるとか。

細々とした打ち合わせにこちらの担当を差し向けます、いついつ何時に御社に

……

来た、その担当を見て、驚いた。

もちろん、彼女も、驚いていた。

それが昨日。流花と十年ぶりの再会。

仕事の打ち合わせそこそこに、飲みに行つてつもる話をお互い夢中になつてやつてたら、日付が変わつていた。あとはまあ、さつき思つたとおり。

『宿なんか取つてない』

『じゃうち泊まれよ、あ、しまった、みどりが出張で居ない』

『その方がいいじゃん』

『あ、そか』

二人ともへべれけのまま帰つて、さらに家中のアルコールをひっくり返して煽つてるうちに、二人ともよれよれになつて前後不覚で寝た。

うん。

そういえば下着だけになつた流花がのしかかつてきた。

それはなんとなく覚えてる。

しかし遼太郎は偉いぞ。

ちやんとそれを払いのけ……

……。

……あー。

……その時だ。

大粒の涙ボロボロ零して泣き出して、

何を言っても聞いてくれなくて。

ごめん、ごめんって謝って頭を抱いてたら……

寝た。

自分のシャツを着せて、運んだ。

ひどい話だな。

そりや……泣くよな。

涙の意味なんてなんだっていい。

泣かせた。それは事実。

相変わらず……駄目な男だな。

「遼太郎、どしたの？」

「……ん？ あ、いや、なんでもない」

そんな夜の記憶など欠片もないかのように、流花は微笑む。もしあったとしても、そうやって微笑む。

僕に気を遣わせないように。

それが、彼女だった。

変わってない。

「……あ、ほら、ヨーグルト、ついてる」

「ん？」

「ごっ、ごっ」

右の唇の端を指し示すと、流花は……

あの一。

「……どうしろと」

「とって」

「自分で取りなさい」

「とっ・て」

「もおーしょーがねーなーもー」

ぴゃつと取った。

「ティッシュティッシュ」

「……それ、あたしの」

「流花くくく。朝ですくく」

「朝だから。」

「……はい」

「あー……もー……」

「ほら！」

「ぱく。」

「にた。」

「僕の人差し指、くわえてチエシヤ猫。」

「早く離しなさいっ」

「ふあい」

「ちよつと糸が引いた。」

「前言百八十度撤回。」

「いかん。」

隙を見せるとやられる。

「隙を見せるとやられる、とか思ってるでしょ」

「……」

「『隙』より『好き』を見せて欲しいな」

「どどいつ歌ってんじゃないんだから」

「……あ。あたしヨーグルト食べるの下手くそ」

「む」

嫌な予感がする。

「……またついちゃった。」

とつて」

「唇のは自分で舐めて取りなさい!!」

「とつ・て!」

「おまえ……あいつかわらなずつわがっままだな」

「誰がこんな風にしたの？」

「俺もした覚えはないっ!!」

「……もう全部昔のことなんだ……」

「だからだなー」

「とっ・つて!!」

「もー……」

そうだ。

十年前もこんな感じだった。

こいつのワガママに振り回されて、でもその時は……

俺も、随分勝手なヤツだった。

いつもこんなじゃれ合いから喧嘩になって……

なって……

「……勝手にしろよ」

ハッ……

流花の目の色が、変わった。

言ってから自分も、自分の中にある得体の知れない突き上げてくるもの、に気がついた。

これは……いけない。

洒落にならない。

「……って言った方がいい？ それとも、恥ずかしそうに、指伸ばした方がいい？ あはは」

「……どっちでも。」

遼太郎の、好きな方」

醒めなかった。

潤んだ瞳が、突き動かす。

肩を取って、引き寄せる。

「あ……」

「これは？ なし？」

「……あり……だよ……」

「流花はどれがいいの？」

「……遼太郎の、好きなの……」

「流花は、どれが、いいの？」

「…………キス……」

「ん」

瞳を閉じる流花。

まっ赤な唇に、白がのる。

じらすつもりはないけど、その距離を楽しむように、

ゆつくりと、そつと……

「ハッ、ハモってる場合か、とつ、とりあえず寝室へ行つて寝たふりしとけ寝たふり!!」

「こつ、ここのは!？」

ガンツ! ガンガンガンツ!!

「あれっ!? どしてチェーンしてるのー!？」

遼太郎さーーん!! 開けてよーー!! 寝てるよーー!?! 寝てていいからチェーンだけ外してよーーっ!! 遼太郎なら、きつとできる!!」

相変わらず無茶言うなあ。

「テキトーにごまかすから!! 現物が居たら誤魔化しようもないだろ!？」

早く!!」

「わっ、わかつた!!」

背中を押すようにして廊下を忍び足で走る。

ほのかに忍者気分を味わいながら、流花が寝室の扉を閉めたのを見計らつて、

玄関にとりついた。

「……ちよつ、ちよつと待つて、みどり！」

「あ、遼太郎……！ 寝てた？」

「あ、いや、起きたて。すぐ開けるから」

チェーンを外すと、飛ぶように……というか文字通り飛んで……みどりが抱きつく。

「ただいま……！」

「おつ、おかえりみどり、は、早かったね」

「うんつ！ 午前中の仕事キャンセルになったの！ 朝一の新幹線に飛び乗っち

やった!!」

「朝一、つて六時の!？」

「うんつ!!」

「そんな……ゆつくりしてればいいのに」

「だって……」

「遼太郎に一秒でも早く会いたいもん!!」

「それは嬉しいけど、眠かっただろ?」

「だいじょうぶー! 新幹線で椅子三つ使って爆睡したよーっ!」

「またそんなオヤジもやらないような大胆なことを」

「あ、お土産もちゃんと買ってきたよ!」

「朝一なの?」

「車内販売! じゃん! 夜のお菓子うなぎパイ!」

「ど!?!」

「ど、と言われても……ん……とつても浜名湖」

「でしょお!? 今夜一緒に食べようね!!」

「うんうん。」

「……あの、あのさ、みどり」

「ほえ？」

みどりは非常なヤキモチ焼きだが、根は優しく純粋で正直な人だ。ちゃんと事情を説明すれば問題はない。

そう、やましいことは何もないのだから。

やましいことはっ!!

「……あの、昨日、『仕事の』関係で『編集の』人と会ってき、遅くまで『歴史と文学について』語り合っちゃってき、その人終電無くなっちゃったから泊まってもらったんだけど」

「そうなの!？」

「……じゃ大きな声出しちゃダメだったね」

「そうなんだ」

声を潜める彼女にあわせて、僕も声を低くした。

後は寝てるから、ということ時間で時間を稼ぎ、疲れてるみどりを寝かせてから流

花をこつそり逃がすいや追い出そう。

「今、寝室で寝てらっしゃるので、このままにして、起きてこられたら帰つてもらうから。とりあえずそーつとりビングへ行こう」

「うん。」

あ、でもその前に洗面所で顔洗つてうがいしてくるね」

「OK。ガラガラは小さく、ね」

「うんっ」

チャンスだ。この間に朝ご飯を一人で食べてたように加工しよう。

——僕は静かにその作業を終えた。

後は何喰わぬ顔をしてみどりを寝付かせれば勝利は我が手に……

「キヤーーーーーッ!!」

「どっ、どうしたみどりっ!!」

僕は慌てて声のする脱衣所の方へ……行くまでもなく。

ソレを直訴状のように捧げ持ったみどりと、廊下の途中で鉢合わせ。
しまった。

そこにあつたのか。

万事きゆうす。煎じヤカン。

「わっ、私のものじゃない可愛いパンツがあるよーーーっ!!」

「えーっとそのーっ、それは僕のだ」

「はい!」

「試みに買ってみました」

「絶対ウソ!!」

「む。どうしてわかった」

「遼太郎の好みじゃないもん!!」

遼太郎こんな派手なシルクのなんか嫌いだもん!

木綿一辺倒白至高主義者だもん!!

こんなライトブルーなんて買うはずないもんつ!!」

「そんなことはないつ!!」

だからー……

おまえなー……

というか、ワザとだろ。

「昔はパステル系とか結構好きだったの!

ペパーミントグリーンとか!!

あんま好きじゃないのにピンク履かされたこともあるし!!」

「履かしたことなんてないだろ!?

どうなのがいいかって訊くから答えただけで!!

それとも何か!? 黒とか紐とか言えばよかったのか!?

「紐も履いたよ? 覚えてない?」

「えっ」

そういえば……引つ張つて遊んだような遊んでないような。ちがう、それはなんか宴会の余興だっけ。

「それ、たぶん私」

「おー、そーだそーだ、あの白と緑のストライプのヤツな」

「誰とでもやってるの!? やっぱ遼太郎……変態だったんだ」

「何を言うか人聞きの悪い。」

好きな人のパンツじゃなきゃ脱がす気など起きんわ!!」

「問題はそこじゃなくて」

「遼太郎、ところで」

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

「あはは……」

「うふふ……」

「……」

「……」

「遼太郎」

「……つ!!」

「はいい！」

「そこへなおれええい!!」

斬るっ!!

斬ってわらわも死ぬっ!!」

「あの、差し出がましい口を聞くようですがみどり姫」

「なんじやつ!？」

「斬り捨てるぐらいなればその方、私めにいただけまぬでしょうか」

「なにをとぼけておるのじゃ!!」

その方も同罪じゃあ!!

斬るっ!

斬ってわらわも死ぬる死ぬるくくく!!」

ぴんぽーん。

目がぐるぐるになって混乱と興奮の極みに至っているみどりどりと、わかってて油を注ぎ倒す流花に水を掛けたのは、軽やかな電子音だった。

「あ、ほら、お客さん! お客さんだよ! 話は後で、後で!!」

「あうくくく!」

「普通お客さんが後じゃない?」

「お前はいいからパンツを履けとりあえずパンツを。」

「はい、どちら様でしょうか」

予定はない。しかしセールスにしては朝が早い。

カメラ付きインターホンを確認する。

女の人だ。

スピیکاから、声が流れた。

「須磨と申します。」

千葉先生のお宅はこちらでしょうか。ご挨拶に参りました」

「須磨画伯!? わざわざこちらへ!」

流花が慌てる。

と、昨日の打ち合わせの一シーンを思い出す。

『挿絵にはとびっきりの大砲を用意してるからね、期待してていいよ!?』
とい

うより、頑張らないと絵はいいけど文がダメ、とか言われちゃうよー』

「須磨画伯……須磨克美（すまかつみ）さんか!!」

「そう！ 早くお通ししなきゃ」

「わ、わかった!!」

「えっ、えっ、なに、なにがどうなってるの!？」

「おはようございます」

「」「わあ!!」

須磨画伯はもうそこに立っておられた。

いつものまに。

「開いておりましたもので……」

ん」

こちらの驚きどこ吹く風、画伯は丁寧な頭を下げられた。

キヤラクターイラストから油絵まで、柔らかいタッチと優しい色遣いが老若男女に大人気、新進気鋭の絵描きさんだ。確か二十四歳とお伺いするが、大柄で、巷の評判通り驚くほどの美人で……なにより、その胸が大きい。

そう、三流週刊誌などで「巨乳絵師」などと話題にされるソレ、は、間近で見るとさらに迫力があつた。

ふと、視線に気がつく。

須磨さんが、じつ、とこちらを向いておられる。

瞳が幾分か、潤んでるような、そういう目で。

「……あ、あの……」

「ヤバイツ!!」

疑問を呈しようとする僕の横で、突然流花が叫んだ。

「ど、どうしたの!?!」

「あれは……あの眼は！」

あの画伯の眼は!!」

「なにになに!? どうしたの!？」

画伯は僕と目が合うと、

にこっ……

と果てしなく微笑まれた。

ただでさえお美しく可愛らしいそのお顔に微笑みが乗ると、それはもう愛らし

さのビッグバン。思わず吸い込まれそうに……

「……大好きなものを、見つけた時の眼……」

「は？」

「あ、気に入って頂けたのかな、はは、嬉しいね」

「遼太郎……ちよつとだけ、覚悟して。なに、すぐ終わるから。」

……生きてればね」

「は？」

「なにになに？ なにが!？」

ばふっ!!

と、突然視界が暗転した。

む？ ここは!?

「あ——————つ!？」

「きた……」

……つて!?

これは!?

これはこれはこれは!?

「ぶむぶうううう!？」

「画伯、画伯、そろそろ落ち着かれて、そろそろ落ち着きになられてー！ー！」
「んー、んー、んー」

二人の懸命の努力虚しく、克美さんは、僕の肩を抱きしめたままぶるんぶるんとそれを揺すつた。

ふによんふによんが、両頬を交互に襲い、離れ、襲い、離れ……

ああ……みどりではありえないこのファンタジー……

このまま夢の世界へ……

「りようたろー！ー！ー！ー！！」

離れる努力をしなさいー！ー！ー！ーい！！」

「しつ、しかふい、それひゃ……」

「画伯、画伯、これは、これは他人の所有物でございます、どうぞ、どうぞここはひとつ我慢なされてー」

「流花ちゃんが言うのと全然説得力無いよ！！」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ!？」

「……んー……素敵……良いものでございます……」

こちらの良いものでございます……

などと言ってる場合ではない。

「ふあの、ふあのふあの、ふはあつ!

画伯、画伯、じつ、自己紹介もまだでございます!!

そう、まだ、挨拶もさせていただいておりますぬくぬく!!」

「……あ。」

……そうでした」

「くはつ! ぜえ、ぜえ、ぜえ」

「大丈夫遼太郎!？」

「だつ……だいじょうぶくない……」

ようやくにして僕を解放してくれた須磨さんは、両手を前に深々と頭を下げら

れた。

「須磨克美と申します。

ご挨拶にまいりました。

どうぞ、よろしく」

先ほどの迫力どこへやら、落ち着かれた画伯はそれだけ言われると、また頭を深々とおさげになる。シンプルだがそれだけに力がこもりまくった、真心のご挨拶。こちらが恐縮する。姿勢を整え直した。

「ちっ、千葉遼太郎と申します！ このたびは弊社のような小さな新聞社の企画にご賛同頂き、誠にありがとうございます！ 精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします!!」

「はい」

そしてまた、ニコヤカに微笑まれた。

殺人的に可愛らしいお人である。

事実殺されかけた。

「……どこへ行きますか」

「はい？」

「……旅に出る、と聞きました」

「あ……」

僕と流花とは顔を合わせて、思わず微笑んでしまった。
なるほど、聞きしにまさる天然系だ。

「画伯、申し訳ありません、まだ第一回の企画も立っておりませんで、これからどこへ行こうかと検討するところです」

「……そうなのですか」

「折角ご準備までしていただいたのに、申し訳ないです」

画伯は心底「しょんぼり」という顔をした。

表情が豊かで、見ているだけでもすごく楽しくなる。

見ればなるほど、左手にはおおきなスケッチブック、背にはおおきなリュック、そして足元は童話の世界の子供達が履いているような厚手の革靴。

これが画伯の完全武装なのだろう。

「旅、つてあの、遼太郎の企画!？」

「そう、画伯はその挿絵を担当頂けるそうなんだ」

「ええっ!? 今をときめく須磨克美に!? すごいじゃない遼太郎ー!!」

「流花がコーディネートしてくれたんだよね」

「むっ」

「ま、ね。」

画伯とはちよつとした知り合いで。無理矢理ねじ込んだ。ごめんね、克美ちゃん」

「無理矢理じゃないです。流花さん。」

旅が、楽しそうだったから」

なるほど、旧知のよしみか。

だよな。普通考えてウチみたいな弱小新聞が、こんな売れっ子を使うなんてできっこない。にしてもありがたい。流花——と出版社——のやる気も伝わってくる。そもそも、こういうコネを持つてる——そして頭脳明晰で手の早い、つまりはバリバリに仕事のできる——流花を担当につけてくれること自体、この企画を大切にしてくれている証拠。

身が引き締まる。

「ね、ね、遼太郎」

「ん？」

「こんなところで立ち話もなんだから、上がって頂こうよ」

「そだね。どうぞ、おかまいできませんが……」

「いえ、そのようなご迷惑は。」

本日はご挨拶ですから。

ここで失礼いたします」

「そんな水くさいことおつしやらずにく。せつかくですから……」

「……流花さん。こちらの、可愛いお嬢様は？」

「まっ。」

可愛いお嬢様だなんってっ!!

見たままをっ!!」

簡単なおだて文句にみどりは舞い上がって頬に手を当てている。

みどりは意外と、いや見たままか、ミーハーである。

「あ、遼太郎さんのなんかであるところのみどりさんです。

今回の件には全く関係ない方です」

「『なんか』 つて何ーーーーー!!

妻です!! 遼太郎の人妻です! 得意な料理はソース焼きそば!」

「おや」

須磨さんは目を丸くして、みどりを見た。僕と見比べる。

「遼太郎さんは、奥さんがおいですか」

「ええ、まあ……」

「可愛い奥さんです」

「えへへ、そうですかー?」

「……でも、いいです。だいじょうぶです」

「はい?」

「大丈夫です」

くすくすくす……

横で流花が笑った。

「どうやら、これが克美さんのペースらしい。」

「につこりと笑って、須磨さんが続ける。」

「みどりさんのような楽しい方と旅ができるのは、とても楽しみです」

「え……あの」

「あ、あの画伯、みどりは今回の旅には……」

今回の企画が通ったと聞いて、一番喜んでくれていたのがもちろんみどりだが、一番寂しそうにもした。近場なら一泊二泊でも、例えば海外へ、となると一週間の単位で家を空けることもある。と行って連れて行く訳にも……

連れて行く？

と、そういえば。

「……流花。カメラマン、要るよな」

「へ？ まあ、記録上はいるに越したこと無いけど……」

「手配、ついてる？」

「ううん、短期はあたしが、長期になる時だけ知り合いかウチの社の……
つてあー、まさか！」

「つてのは、どう？」

会話を理解したみどりが、両手を高くに挙げた。

「あつ！ やります!! カメラ大得意!! 写真部!!」

「ホントにく〜く!?」

大嘘である。

みどりは機械に弱い。

そりやもう、果てしなく弱い。

魔法瓶は飲みきらない限り永遠に温かさを保てると信じていた。

理由は「『魔法』だから」。

こないだカメラ付き携帯を買って、使い方を教えるのに一週間かかった。

写真部、というのは高校でモデルやってたからで、暗室作業などは一秒も経験

がない。

「ま、まあ、専門職じゃなくてもいいわけだし、須磨さんで予算使い切っちゃうだろうから、こんな感じでいいんじゃない？」

「だけどー……」

「荷物も持つよ！ 力持ちだから！」

曲げてみた二の腕から、力こぶはもちろん出ない。

ちなみに握力は右一八キロ左一五キロ、五〇m走は一八秒四。

しかし流花も、仕事の話はプロの顔。コーディネートとして純粹に、一名分仕事が増えることのコストと、メリットを計算しているらしい。しばらく天井を睨んで、きゅつ、とこちらに向き直る。

「遼太郎の世話……なら、プロだよね」

「もちろん!! それはまかせて!! おしめの取り替えまでバッチリ！」

「そんなプレイはしとらんわ！」

「ふ……じゃ、お願いしようかな」

「やった！ 流花ちゃん、大好き!!」

「ふふ」

軽くため息をつくようにして、流花は腕を組んだ。

しかし、まさかこんな簡単に通るとは。

居並ぶ顔を見るとまあなんと……バラエティに富んでることか。

確かに、この面々で旅をすれば、いろんなことが起きて、いろんなものが見れるような気がする。

きつと流花も、そういう効果を期待したに違いない。

みどりの元気と勢いは両方も……旅に、すぐく威力のある武器だった。

奇しくも凶らずも出逢ったこの機会を、逃す手はない。

「そうだ！

じゃ、企画会議も兼ねて、みんなで朝ご飯でも行きますか！ 画伯もぜひ、ご

「一緒に！」

「ん」

「あつ、それがいいね！ ぜひそうしましよう!!」

「あでも、あたしいただいちゃったので、座ってるだけでいい？」

「大丈夫ですよ、流花さん。」

私も朝ご飯は食べてきました。

同じです」

「何が大丈夫かよくわからないのですが」

「朝ご飯は三食まで可能です」

「それは画伯だけの特殊事情であつて」

「……。」

「……四食は頑張れば何とかなるのですが、五食は無理です」

「いや多い方ではなく」

「そうだね、五食は無理だよ。お昼になっちゃう」

「試したことあるの!？」

「なつてしまいます」

画伯は眼を細めて大きくうなずかれた。

試されたことがあるのだろう。

なるほど、あの二門の大砲はそのようにして製造されたのか……

「流花ちゃん、コーヒーだけでもいいじゃない」

「コーヒーはさつき遼太郎に淹れてもらったから」

「はい!？ なにそれなに!? コーヒー淹れた!？」

それよりなにその呼び捨て! なんかめっちゃいい仲みたいじゃない!!」

「だっていい仲間もん」

「嘘だ嘘だ嘘だーっ! 人の旦那を勝手に呼び捨てるなー!」

「だってだって遼太郎が『遼太郎って呼んでいいよ』って言ってくれたんだもん

遼太郎が

「だから遼太郎遼太郎言うなー！ それいつ！」

「昨日の夜。」

二人つつつつきりの時

「きー!! なにそれなに遼太郎それほんとー!？」

「だっ、だつて同い年だしき、逢沢さんとか千葉さんとか言うのもよそよそしい
だろ？」

「えっ……同い年なの、二人」

「そ。羨ましい？」

流花はウイंकを一つ飛ばした。

昔のことは黙ってる、つてことか。

……ほとんどバレてるつて。

「……おばはん」

「きつ……ふ、ふん。小娘が」

「わつたしは既つ婚者若つ奥つ様くく」

「く……きき……」

「大丈夫ですよ、流花さん」

「画伯、またしても何が大丈夫ですか」

「私も未だ結婚していない未婚者です」

「いや、それはまたなんの根拠にも」

「うん、画伯、二十四ならまだまだ大丈夫です。」

あと四年は大丈夫です」

「二十八は駄目だと言いたい？」

「あのね、はとこの旦那さんの義理のお姉さんの友達に二十八でお亡くなりになった女性がいて」

「遠いなー」

「ていうか赤の他人じゃない。なに、嫁に行けずに絶望して？」

「ううん、交通事故」

「なんの関係もない話じゃない!!」

「違うよ、だから流花ちゃんも早く『テキトー』な人見つけないといつ死んでもおかしくないよ」

「だから死なないって。しかもどしてそう『テキトー』ってのにアクセントあるのよ。」

……そうだね。

テキトーってのなら、ここにヒジョーにいいのが一人」

きゅっ。

流花が僕の腕を取る。

なんの反論もできない。

「だからやめなさいと言つとりまするでしょーっ！

ウチの遼太郎はテキトーじゃないもんっ!!」

「若くて可愛い嫁がいるのに、留守宅に女引っ張り込むようなヤツをテキトーと言わずになんという!!」

「うっ。それは否定できないよ……特に『若くて可愛い嫁』というあたり!」

「ひどいよ流花、裏切り者ー!!」

「裏切りってことは何か密約があつたのー!」

「いやそうじゃなくてそれは言葉の綾子さんで」

「そもそも『流花』とかなにその親しげな下の名前の呼び捨て合いはー!」

「いやだから流花が『流花って呼んでいいよ』って言ったんだよ流花が」

「流花流花流花流花言うなー!」

遼太郎、あなたジーザスクライストスーパースター!」

「あ、ルカは一世紀の人だからイエズスと直接の面識はないはずだよ」

「そんな細かい歴史的事実はどおでもいいの!」

とつとにかくこの、この腕を離しなさいってばーんんんん!!」

「あの」

脱皮前のセミのように僕の腕にすがりつく流花と、それを引きはがそうと流花に脱皮前のセミのようにすがりつくみどりに、画伯が割って入ってくれた。

おお、ナイス助け船。

「楽しそうなので私も混ぜてください」

「楽しくないです!!」

……別の海賊船だった……

「残念です」

画伯は右の人差し指をまるでしゃぶるように唇に当てた。

そういう子供っぽい、というよりも子供そのものの仕草を、
24 歳花盛りの大柄女性がすると、やっぱり果てしなく可愛らしい。

なるほど、こりや人気も出るわ。

「では……朝ご飯に行きませんか」

「「あ」」

と、ちゃんと助け船も入れてくれる。

見ると、微笑む。

画伯、ボケツとしてるようで、実はちゃんと考えてるのかも。奥の深い人だ。

「そだそだ、じゃ流花ちゃんは見てるだけね」

「やっぱ食べる。トースト半分とベーコンエッグとヨーグルト少しか食べてな

いもん。ヨーグルト少しか。ね、遼太郎」

「ま、まあ」

「あ、なに、それまた何かのキーワードなの!？」

「いや、まあ」

「洋食ですか」

「え、あの、んーと、そうですねー……遼太郎、どこにする？ 洋食？ 和

食？」

画伯の少し古風な言い方に釣られて、みどりが尋ねる。ようやく収まりそうな場に胸なで下ろしながら、少し、思案した。

「じゃ、お客様も多いことだし、駅前ホテルのブレックファースト・バイキングと張り込みますか」

「やたー！ー！」

「あたしはどこでも」

「私も」

「美味しいですよ、和も洋も点心もあります!!」

「点心……いいですね。餃子、好きです」

「画伯、朝から餃子は少し厳しいんじゃない……」

「大丈夫だよ流花ちゃん、あそこのはニンニク使っていないし、水餃子、とつても美味しいよ！」

「なる、水餃子……ならまあ、悪くないかな」

「うん！ あそこの水餃子なら、朝から百個はいけるよ!!」

「百餃子!!」

ぴしゃぴしゃぴしゃ〜ん!!

画伯の双眸が光り輝いた。

お手にもたれたスケッチブックから延びる紐をくるり、とたすきに掛けると、鼻息荒く言い放つ。

「まいりましょう!!」

「はい!!」

その脳裏には既に、水面に浮かぶ半透明のプリプリ物体が百ばかり泳いでいるのだろう。

居ても立つてもいられないとばかりに大股で歩き出す画伯の後ろから、跳ねるようにはみどりが続く。

その後ろで、ドアにカギを掛ける僕。
待ってくれる流花。

「……みどり、ホントに連れて行っていいの？」

「連れて行きたくないの？」

「んなことはないけど」

「正直なところを言おうと」

流花の大きな猫目が、朝の光に輝いた。

「わかんない。……昨日の、今日だからね」

「……」

「でも旅は。んっ……」

両手を拳げて伸びをする。

シャツは、僕の。

「二人でも多い方が、楽しいよ」

それは、間違いなかった。

うなずくと、笑う。

眩しいのは、笑顔も、朝の光も。

「ふふ……楽しい旅に、なりそうだね」

「はは……僕は今から不安でいっぱいだけど」

「遼太郎、心配症、変わってないね。」

世界中の悩み、一人で引き受けてるみたいな顔して

「流花のクソ度胸こそ変わってないよ。」

ぶつかってきやなんでもできると思いすぎだ」

「……今も、思ってるよ」

「そんな真剣な眼なんか見つめない」

「……相変わらず、イジワル」

「そんなことないよ、僕がいつ意地」

ちゅつ。

「……なつ、おま、それは」

「朝の挨拶、だよ？」

ただのね」

眼を細めてウインク一つ、右手がぽん、とシャツの胸元を叩く。その癖も、昔と同じ。

——二人を現在に引き戻したのは、朝の空気に響く声。

「……二人とも遅いよ——！」

早く早くー！ー！

「はいはい。今行きまーす！ 餃子、餃子」

小走りに駆け出す流花の後ろで、僕は一つ小さく、ため息をついた。

でもそれは嫌なため息ではなくて……肩の力が抜けるような、心地よい一呼吸。歩き出す。

跳ねるように、脚に、身体に、力が湧いた。

新しい一步はいつも、人の心を春にする。

……楽しい旅に、なる気がする。

というよりも。

“……楽しい旅に、しよう！”

これより出発！